



中荒井の旧郷頭小森宅の屋敷景観

1、屋敷構え 会津盆地は集村をなしているから、散村地域の屋敷の周囲に、主に家添えの耕地をもっているほどの、古くからの豪族屋敷というほどのものは見受けない。しかし寛文五年の書上げや、文化六年の新編会津風土記などをみると、下荒井の城は別として、館とよぶものが数多くある。中荒井村の館は東西二〇間余、南北一町余とあるから、四反以上の館であったと思われる。中荒井組郷頭を勤めた小森家の宅地は、現在もほぼ四反歩あるようであるから、このくらいが、最大の屋敷規模であったかと思われる。岩手県中部などにみられる、一町五、六反にも及ぶ、一戸の生活をほぼ支え得る農業適性規模面積に匹敵するほどのものはなく、やはり、主には中世以後の開拓による屋敷どりの集村とみられる。分家の数も、古くから一〇数軒以上に及ぶというほどのものも見つからない。

館に住みついたのは、やはり中世頃と思われるが、それより連綿として代を重ねて今に至るといいうのも、農家には盛衰が激しかったから、案外少ないではないかと思う。その点系図書などからのみでは考察の困難な場合もある。

しかし、住み主に変遷があっても、屋敷の規模なり、築構の模様を伝えて